
プレゼント。

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレゼント。

【Nコード】

N3828L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

夏真っ盛り、吹き出る汗の中であるとあるものを必死に探している少年探偵団—1人。それは、元太の母が大事にしていた結婚指輪だった。元太くんフィーチャリング小説（笑）。ラブ要素なしです。

※Candlelight閉鎖に伴い、NOVELSからの移行小説。

太陽光をこれでもかと浴びたアスファルトから足元に浴びせる熱気。

風もなく、上からも下からも暑さが自分たちを締め付ける。

道端で、まるで蜘蛛のように這い蹲ってあるものを探している小学生3人組――灰原哀と江戸川コナンと、小嶋元太だ。

『今日はこの夏二度目の猛暑日になるかもしれません。熱中症には、くれぐれも気をつけてください』

そう、確か朝の天気予報でも言っていたはずだ。

なのに何で自分は、こんな炎天下の中、アスファルトに手をつけて探し物をしなくちゃならないのか――。

簡単に言うと、元太の責任。

光彦も歩美も夏休みで出掛けていて、ヒマをもてあましていた元太が、溜まっていた宿題を教えて（見せて？）もらおうと、コナンや哀を家まで誘った時のこと。

何とか一区切り終え、待ってましたというように、彼が見せびらかしたのは、先日たまたま部屋の模様替えをした時に見つけたシンブルなプラチナゴールドリングだ。

引き出しの奥に入っていたそうだが、まだ家族の誰にも指輪を部屋で見つけただなんて

言っていない。けれども、それは女モノの指輪。しかも、おそらく結婚指輪だろう。

なぜつけないのかはその理由はわからないけれども、それはすごく大切なもの。失くしていたとしたら困っているだろうし、逆にそんなものを元太が長い間持ち続けていたら、きっと最終的には失くす

だろう・・・。

そう判断した二人は早く母親に返せと忠告したのに。

――やだよ！明日歩美が帰ってきたら、一番先にあいつに見せるんだ！

そう言って嬉しそうに指に嵌めて電灯に掲げていたけれど、まさかコナンと哀を見送る

そのときまで、それをまだ身に着けているとは思わなかった。会話に夢中になって、手を振り回して。

哀の目の前で、ぴゅーんと何かが飛んで、カチン。何かが落ちる音がした。

そしてそれに続けて元太の、『あぁー！！！！』という、悲鳴に近い叫び声。

指に嵌めていたそれが、まさか抜けてどこかに落ちるなんて――。

プレゼント。

「・・・ったく。何やってんだよ、オメー・・・」

滴り落ちる汗を腕で拭いながら、コナンは口を尖らせる。

もちろん手元は草を掻き分け、鈍い光を放っているであろう指輪を探し続けたまま。さすがに決まり悪いのか、噴出す汗もそのままで、しどろもどろで元太は言い訳をする。

「だっ、だって・・・しゃーねーだろ、抜けなかったんだから。汗かきゃ抜けると思って」

「そうしたら、道端でタイミングよく抜けたのね、おめでとう。病院に行かなくてすんだわね、よかったじゃない」

もちろん、それは哀流の皮肉であって。

そうも言わなきゃやってられない。ま、そんな嫌味も、元太には通じなくて。確かにその通りだな、なんて嬉しそうに照れ笑いをした。その隣でコナンは乾いた笑いを浮かべる。そんな彼らを見るのも、また暑苦しい。

哀は思わず、ふう、と小さくため息をついた。

まったく厭な日になったものだ。今日は最低。

きっと朝の占いでは、運勢はよくないと言われているはず。

それでも、頭に被るそれがなければ、もっと不快指数は上昇していたかもしれない。

麦藁帽子だ。淡い、グリーン。

昨日、博士が高校時代の友人に会うからと、一人朝早く出掛け、帰ってきたときには彼の手元にあったもの。

――哀くんに似合うと思つての。

そう嬉しそうに笑つて、彼は戸惑つた顔の哀の頭にひょいとそれを被せた。

すっぽり頭にちょうどいい。

それからもうひとつ、と差し出されたのは淡い桃色の麦藁帽子。やっぱり子供用だ。

案の定、それは今、家族と田舎に帰省している、歩美に向けて。

――明日哀くんの方から歩美くんに渡してくれんかの。

そう言われて渡される。何となしに受け取ったけれど、桃色のそれはとても綺麗で。

それを被つてにこにこと笑っている歩美の表情が目には浮かび、思わず口を綻ばせて。

昨日はそんな感じだったのに、まったく今日はついてない。

麦藁帽子の鰐を掴むと、日光があたらないようにと、そつと下げ、再び草の茂みを掻き分けようとしたとき、目線の下に、乾いた溝のコンクリートとコンクリートの隙間にあった鈍く光るものを見つけ――

「・・・あつた」

思わずつぶやいた。

☆☆☆

ジジジ、と終始耳をつくセミの鳴き声。

でベンチに腰掛け、仲良くスーパで買ったばかりのシャーベツトアイスを食べて涼を取る。もちろん、それは元太のおごり。・・・というか、ツケ。

「ったく。気をつけろよ？今度失くしても俺たち、何もしねーかならな」

「わ、わかってるよ」

べろを水色にさせて、コナンがむっつりした顔で睨めば、決まり悪そうに、その大きな体を小さく縮こまらせた。

元太のふくふくとした掌中にある指輪。彼は寂しそうにそれを見つめ、ぽつり、つぶやいた。

「・・・やっぱり歩美に見せたかったな」

「バーロ、何度言ったら・・・」

「喜ばないわよ、彼女」

「・・・え？」

唐突に哀が言ったから、きょとん、としてコナンも元太も哀を見つめた。

「そんな価値のないもの、吉田さんなら喜ばない。そんなの、吉田さんにとってはそこらへんに落ちている石ころと同じ値打ちであることくらい、あなたにはわからないの？」

「なっ、お・・・い灰原」

「灰原テメー・・・！」

カッとなって顔を真っ赤にさせて元太は哀の胸倉をつかもうとしたが、寸ででやめた。

・・・友達を、ましてや女の子を殴るなんてこと、元太にはできるわけもなく。

けれど、彼の最大限の抵抗とでもいうように、不快の意志の表れとでもいうように、強く哀を睨んだ。

哀も、それに動じることもなく、いつものように涼しい顔をして。
・・・気まずい雰囲気。まずい。非常に気まずい。

さすがにコナンも慌て、眉を顰める。

「おい、灰原、ちよっ・・・。どうしたんだよ、らしくねーな。

毒舌にしてもそれは言いすぎじゃ」

「・・・言いすぎじゃないわ。本当のことを言ったまです」

「だからそれが言いすぎだって。オメーには価値のねえ指輪かもしれないけどよ、これは元・・・」

そこまで言って、コナンは『あ』とつぶやいた。それから、なるほどという表情^{カオ}をする。

そんな彼に気づき、哀は呆れたような表情を見せた。

再び元太を見れば、瞳に涙など浮かべていた。

「そうだよ、オメーは指輪でうな重何個買えるか、オメー知らねーだろ！これはだなあ、父ちゃんが母ちゃんのために」

「・・・お父さんがお母さんのために、何？」

じ、と見つめる哀の視線。それに戸惑い、一瞬言葉に詰まって、後ずさりする。

「何・・・って、だから・・・父ちゃんが、母ちゃんに買ってやったんだよ。昔、この指輪をずっとはめてたとき、コレを見せながら、母ちゃんが言ってたんだ。まだ二人が恋人だったとき、すごいうまいもの食うためなら何でもするような父ちゃんが、突然、それまでやったことない料理なんて始めて。・・・おかしいなと思ってたら、それはこのためだったっていう・・・。そんな立派な指輪を」

「あなたは失くそうとしたの？」

「ばっ・・・」

言い返そうとして、言葉が出なかったのか。元太は困ったような表情をして、コナンに助け舟を求めようとした。

「お金とかそういう問題じゃないのよ。あなたのお母さんが大切にしているのは、『価値』はそういう意味じゃない」

「え？」

「あなたのお母さんにとって、それは、『お父さんが自分のことを想って』『苦労して買ってくれた』大切なものなのよ。歩美ちゃんにとっては、それは価値のないもの。たとえば、それがすごく綺麗な色をして、世界中の女性を虜にするものが目の前にあったとしても・・・お母さんにとっては今のこれが世界で一番大切なものであって、その綺麗な宝石じゃない」

「・・・それは、あなたのお母さんにだけ価値のあるものよ。引き出しあけて泥棒みたいな行為をして、わざわざ好きな子のために見せにいくような人には、あの子は喜ばない。・・・そんな大切なものを一度失くしかけるようなそんなあなたにはもったね・・・」

「・・・」

気がつけば、肩を落として。大きい肩がまるで一回りも二回りも小さくなってしまったかのように、しょんぼりとうな垂れていた。

「早く帰りなさい。もしかしたらあった場所になくなって、あなたのお母さん、困っているかもしれないわよ」

「わ、わかったよ・・・じゃ、じゃあな。いろいろあんがとなっ」

アイスを最後の一口、ぱくつと食べた瞬間。アイスの棒に、「あたり」の文字。

それに気づくと、一瞬逡巡していたようだが、近くにあった水道でじゃーと大雑把に洗い、再び二人の元へ戻ってきた。それから、その棒をまだ半分も食べていない哀の鼻先に見せた。

「え」

思わず戸惑って、目を白黒させる哀に、元太はまじめ腐った顔でこう言った。

「やる」

「え？」

「カンシャの気持ちだよ。・・・暑い時に食べ。・・・何なら今買ってきてやろうか？おかわり用に」

「いらないわ、お腹壊すから」

「そっか・・・」

今喜んで目の前で食べてもらいたかったのか、あからさまにがっかりした表情の元太に、哀は思わずぷつと噴出した。それから、そつとその棒を受け取る。

「明日ね、使わせてもらうわ」

「そっか」

「・・・ええ。『ありがと、ね』」

「っ!!」

その瞬間、ぱああっとしぼんだ風船が膨らんだように、つぼみが一瞬で花咲いたように彼の表情は明るくなって。

「おお！」

と嬉しそうに言った。

「なあ、灰原。俺、とーちゃんの気持ちがよくわかった気がした！価値ってどういうもんか。すっげー切なくて嬉しいもんなんだな！」

「そ、そう?？」

「じゃあな！」

嬉しそうに、大きい体をぴよんぴよんと揺さぶって帰っていくその後ろ姿を、コナンと哀はあっけにとられたような表情で見つめていた。

「あんなにぴよんぴよん飛ぶような歩き方をして、また指輪落とさないかしら……。心配だわ」

「……。つか、変なこと言って、また元太が変な気起こしたらどうすんだよ」

「変な気、って……。？」

「だから……。……。……。……。……。」。

口に出そうとしていた言葉をしばしやめ、じっと何かを考え込み、ま、ありえーな。とポツリ呟いた。

「何よ」

「いや、何でもない」

きよとん、としていた哀に、コナンはしれつと答える。

二人はしばらくそうしていた。それから、ようやく気づいたように、コナンが麦藁帽子に目を向ける。

「そーいや、オメー、その麦藁帽子。似合うじゃねーか」

「あら、ありがとう」

「博士か？」

「そう。……やっぱりあの帽子、私からじゃなくて博士から渡してもらおうかしら」

「え？」

「……彼女が喜ぶわ」

哀の言葉に、何を言っているかわからないという表情で首を傾げた。

それに、なんでもないと哀は首を横に振った。

☆☆☆

それから10日ほど経ち、今日が最後の夏休みの日。

「あーいーちゃんっ♪」

阿笠邸 地下室でパソコンに向かう哀は、その愛らしい声にはっと力を上げた。

時計を見ると夕方5時。

この声は歩美だ。

すぐに気づいたが、こんな時間に何の用だろうという気にもなる。

けれども、最近、研究が立て込んでいたのと、その疲れで少々風邪を引いていて。

子供たちに風邪をうつさないようになるとなるべく接触を避けていたため、彼女と会うのはそういえば5日ぶりだということにふと気づき、思わずかおを綻ばせた。

トントンと軽やかに階段を上がり、玄関へ向かい、ドア穴から彼女の姿を確かめ、ドアを開けた。

そこにはかわいらしい姿で、そして眩しい笑顔で立っている歩美がいた。

もう何回かつけてきてくれた、彼女のお気に入りのピンクの麦藁帽子を今日もしてきて。それにあったピンクのチュニックTシャツと、白いサンダル。今日の歩美はとても可愛い。けれども、それにもう一つ、彼女は今日、一つの新しい変化をした。・・・もちろん、哀はすぐに気づいたわけだけでも。

目線を指先に移し、哀はにっこり尋ねた。歩美以外誰にも見せない表情で。

「可愛い指輪ね。どうしたの？」

オレンジ色の大きな宝石が輝く指輪。・・・もちろん、玩具だけだ。

「哀ちゃんがカゼで来れなかった夏祭りの日。元太くんが、買ってくれたのよ?」

「小嶋くんが?」

「そう。おこづかいから買ってくれたの。あの元太くんがだよ、びっくりしちやって・・・」

「嬉しかったでしょう?」

「うん、とっても・・・だから、お札になにかしてあげたくって・・・もうそのときはお金全部使っちゃった後だったし」

「・・・うん、それで?」

「それで、ね?」

出されたものは、いくつかのクッキー。ちゃんと可愛くラッピングされたものを、1袋。

それを手渡され、一瞬意味がわからず、哀は目を丸くした。

「?」

「博士に・・・この前の麦藁帽子のお礼。・・・それと、もう1袋、元太くん」

「そう。・・・作ったの?」

「うん。ママと一緒にだけだね。・・・ホントはコナンくんにもあげたかったけど・・・。。。。今日はね。・・・だから哀ちゃんにもないんだ。ごめんね」

「・・・いいわよ、私は」

大変だったよーとかわいらしく眉を顰める歩美を見て、哀は思わずふっと笑った。

こんなことがあったなんて知ったら、また円谷くんがヤキモチをやくわね、なんて考えて。指輪をプレゼントしたなんて聞いたときもまた、抜け駆けだなんて怒っていただろうな、と。

相変わずあそこの三角関係も面白い。

「お疲れ様。・・・ごめんね、博士今ちょっと出かけてて・・・待ってる？」

「ううん、いいよ。こっちこそ、こんな時間にごめんね。・・・今から元太くんち行くんだ」

「そう、・・・いつてらっしゃい」

「うんVじゃあね♪」

そう言っただけでかわいらしく小さく手を振ると、歩美は玄関の傍においてある自転車に乗った。

「気をつけなさいよ」

「うん。じゃあね、明日、また学校で！」

「そうね、また明日」

にっこり微笑むと、歩美は自転車に乗ってゆっくり走り出す。哀はその後ろ姿をじっと見つめていた。

「クッキーか・・・。博士、喜ぶわよ」

そうポツリとつぶやく。

カロリーが気になる。けれども全部博士のもの。

甘いものが控えめな博士、毎日少しずつ味わってもらわなきゃ。

なんたって、吉田さんが心を込めて作ったものだもの。

哀はふ、と嬉しそうに口元を綻ばせ、歩美の姿が見えなくなった後も、しばらくずっとその方向を見つめていた。

（後書き）

この小説は、小説を書く場合は、歩美&哀ちゃん、あるいは光彦&哀ちゃんの話は作っても、光彦や歩美ちゃんがその場所でないのに、元太が、哀ちゃんと二人トーク・・・とかそんな話がそういえばないなあと考え、いつも、いいポジションにあまりつけていない彼を今回は積極的に出そうかと思ひまして。一番子どもらしい姿を試みて。・・・そして、最後にはご褒美を与えてみましたVいかがでしたでしょうか。

しばらく何も書けない日が続き、最初に書き始めたのがこの小説。だから1歩踏み出せた記念の作品でもあります。みんなに愛される小説になってほしいです。

ここまで読んでくださって、どうもありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3828/>

プレゼント。

2010年10月11日21時51分発行